

# てるちゃん

にじいろとほうせき

# 虹色の宝石





だいた  
てるちゃんは、じゅうどう が大好きなペンギン。

しらしま  
ぎょうは、白良浜で、  
さく、さく。  
さっ、さっ。

すな  
いっしょうけんめい、砂をほっています。

「どこかな、どこかな」

なに さが  
てるちゃんは、何かを探しているみたい。

なに さが  
いったい、何かを探しているのかな？

ゆめ  
ゆうべ、てるちゃんは、ふしぎな夢を見ました。

ひか うみ うえ ちい ようせい  
きらきら光る海の上に、小さな妖精さんが、  
ふわりとあらわれたのです。



おね  
「てるちゃん、お願い。  
にじいろ ほうせき  
虹色の宝石を、さがしてほしいの。」

あらし  
「ゆうべの嵐で、  
ほうせき  
宝石がどこかへ  
いってしまったの。」

「このままだと、  
うみ  
海がざわざわして、  
こま  
みんなが困ってしまうわ」

ゆめ なか  
てるちゃんは、夢の中で、こくんと うなずきました。  
「ぼく、さがしてみるよ」





しる すなはま  
てるちゃんは、白い砂浜をほりつづけました。

で  
けれど、出てくるのは、  
ちい いし かい  
小さな石ころと、貝がらばかり。

にじいろ ほうせき  
虹色の宝石は、  
み  
まだ、見つかりません。

「ふう……ちょっと、ひとやすみ」

した  
てるちゃんは、パラソルの下で、  
あせ  
汗をふきふき、ひとやすみしました。



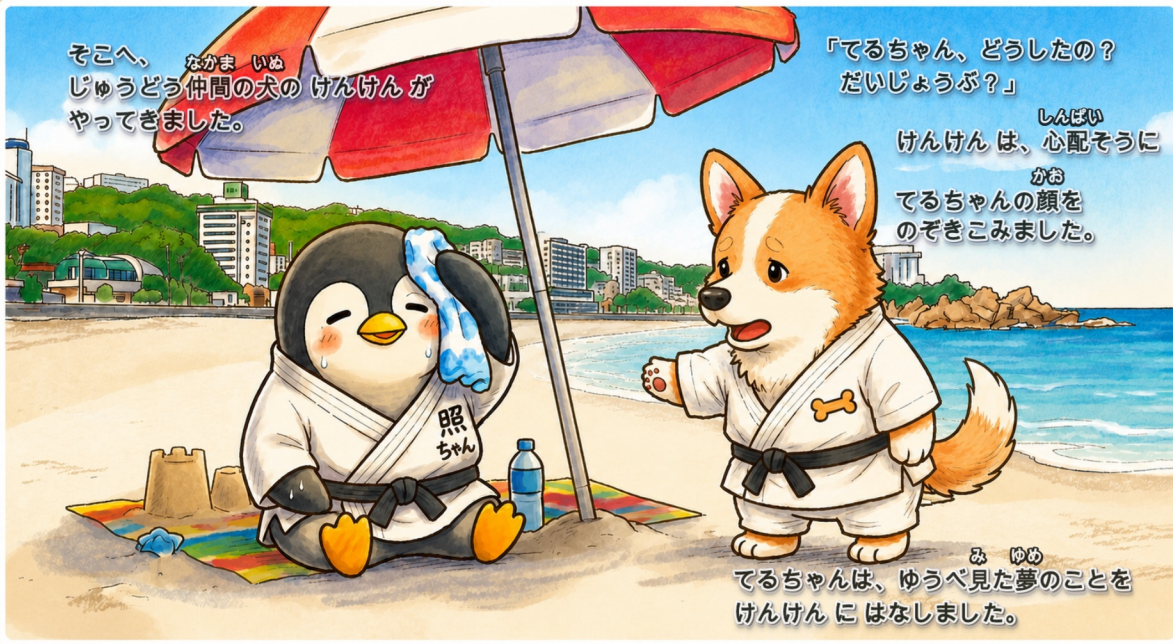
そこへ、<sup>なかま いぬ</sup>  
じゅうどう仲間の犬の けんけんが  
やってきました。

「てるちゃん、どうしたの？  
だいじょうぶ？」

<sup>しんばい</sup>  
けんけん は、心配そうに

<sup>かお</sup>  
てるちゃんの顔を  
のぞきこみました。

<sup>み ゆめ</sup>  
てるちゃんは、ゆうべ見た夢のことを  
けんけん にはなしました。



うみ ゆび  
けんけん は、海のむこうを指さしました。

かいがん どうくつ  
「そういえば、あっちの海岸の洞窟で、  
ひか み  
きらっと光るものを見たことがあるよ」

「ほんとう？ にじいろ ほうせき  
それ、虹色の宝石かもしれないね」

かお  
てるちゃんの顔が、あか  
ぱっと明るくなりました。

「よし、いってみよう！」  
かいがん どうくつ む  
ふたり は、海岸の洞窟へ向かいました。





どうくつ なか  
洞窟の中は、ひんやりとしています。

そのとき、  
おく なに  
奥のほうで、何かが

バサッ

なに ひか  
「あっ、何か光った！」

ほうせき  
でも、それは宝石  
ではなく、ちいさな  
こうもり さんでした。

にじいろ ほうせき  
「虹色の宝石、  
どこにあるのかな」

てるちゃんと けんけんは、  
あちこちを きよる、きよる。

にじいろ ほうせき  
虹色の宝石は、ここにはないようです。







ほうせき  
「宝石は、どこにあるのかなあ」

どうくつ で ふたり まえ  
洞窟から出てきた二人の前に、  
ちい ふね う  
小さな舟が、ぷかぷか浮かんでいました。

ふね うえ  
舟の上では、  
ネコ の はまにゃん が、釣りをしています。

「おい、はまにゃーん！」

おお こえ よ  
てるちゃんは、大きな声で呼びかけました。

にじいろ ほうせき み  
「虹色の宝石、見なかった？」

はまにゃんは、てるちゃんとけんけんを  
こぶねの おき あんない  
小舟に乗せて、沖へ案内しました。

「このあたりだよ」

うみ なか ゆび  
はまにゃんは、海の中を指さしました。

した  
「さっき、この下で、ひか み  
きらっと光るものを見たんだ」

「ほんとう？ にじいろ ほうせき  
それ、虹色の宝石かもしれない！」

てるちゃんは、ゴーグルをつけて、  
はりきりました。

うみ なか さが  
「よし、海の中を探してみよう！」



うみ なか  
海の中には、

ひか  
光るものがたくさんありました。





さが  
でも、いくら探しても  
にじいろのほうせき  
虹色の宝石は、見つかりません。



「うーん、ないねえ」



およ さんになん  
たくさん泳いだ三人は、  
つか  
すこし疲れてしまいました。

「いったん、ひとやすみしよう」

てるちゃんたちは、

うみ あ  
海から上がることにしました。

さんにな  
三人は、てるちゃんカフェで  
ひとやすみすることにしました。  
てるちゃんは、みかんジュース。  
けんけんは、ソフトクリーム。  
はまにゃんは、いちごのかき氷。

「つめなくて、おいしいね」  
てるちゃんたちがほっとしていると、  
うさぎのかりんちゃん <sup>なに</sup>がやってきました。  
「みんな、何してるの？」

おすすめ  
・ソフトクリーム  
・かき氷  
・ジュース

MENU  
・ソフトクリーム  
・かき氷  
・ジュース

さんにな にびいる ほうせき  
三人は、虹色の宝石を  
さが 探していることを  
はな かりんちゃん に話しました。



はなし き  
話を聞いた かりんちゃん は、  
い  
言いました。

たいへん  
「それは大変。  
さが  
みんなで探せば、きっと見つかるよ」

はまべ  
かりんちゃんは、浜辺のむこうを  
ゆび  
指さしました。

さが  
「あっちのほうも、探してみよう」  
い  
「うん、行ってみよう！」

みんなは、かりんちゃんに  
い  
ついて行くことにしました。





せんじょうしき き  
てるちゃんたちは、千畳敷にやって来ました。  
てわ さが  
みんなで手分けして、あちこち探してみました。

ほうせき で  
「宝石さん、出ておいで」  
「ここにもないね」  
「こっちにも、ないよ」

さが  
どれだけ探しても、  
にじいる ほうせき み  
虹色の宝石は、見つかりません。



てるちゃんたちは、こんどは  
きたはま どうもん  
北浜の洞門にやってきました。

ほうせき で  
「宝石さん、出ておいで」

てるちゃんも、けんけんも、はまにゃんも、  
いっしょうけんめい さが  
一生懸命に探しました。

かりんちゃんは、岩場をぴよんぴよん登って、  
たが のぼ  
高いところから、あたりをぐるりと見わたしました。



にじいろ ほうせき  
でも、虹色の宝石は、見つかりません。

そのうち、空は  
み ゆうや いろ  
だんだん夕焼け色に  
そまっていきました。



そのとき、  
かりんちゃんが  
おも こえ お  
思わず声を上げました。



「あっ、あっちのほうに、  
ひが  
すごく光っているものがあるよ！」



いそ い  
てるちゃんたちが急いで行ってみると、  
ひか ゆうぐ ひ  
光っていたのは、夕暮れのお日さまでした。

うみ うえ きんいろ ひかり  
海の上には、金色の光が、まっすぐのびています。

ゆうひ  
「でも、夕日だけで、  
こんなにキラキラするかなあ」

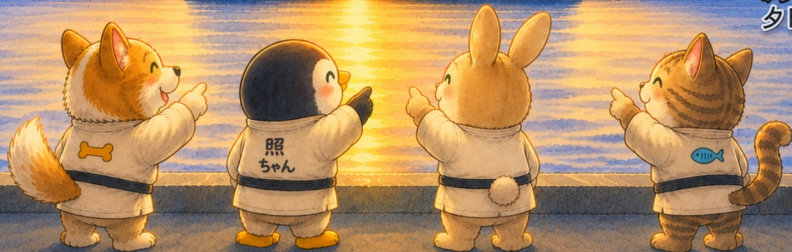
ひかり み  
てるちゃんは、じっと光を見つめました。

にじいろ ほうせき  
「もしかして、虹色の宝石が、

ゆうひ て  
夕日に照らされているのかも・・・」

い  
「ぼく、行ってみる！」

ひかり  
てるちゃんは、光のほうへ  
はし だ  
走り出しました。





ふしぎ うみ ひかり  
不思議なことに、海にうつった光は、  
みち つづ  
道のように続いていました。

ひかり みち  
てるちゃんが、光の道に あし  
そっと足をのせてみると、

うみ ひか  
海はきらりと光って、 あし しず  
てるちゃんの足は沈みません。

うみ うえ  
「すごい。海の上を歩ける！」

いっぽ いっぽ  
てるちゃんは、一歩、また一歩、  
ひかり みち すす  
光の道を進みました。

ゆうひ む  
そして、夕日に向かって、  
はし  
まっすぐ走っていきました。



はし ゆうや そら  
走っていくうちに、夕焼けの空は、  
ほしぞら が  
いつのまにか星空に変わっていました。

うみ む いわ にじいろ ひかり  
海の向こうの岩のあいだから、虹色の光が  
きらきら こぼれています。

「あそこだ！」

てるちゃんは、  
むね  
胸を ときどき させながら、  
ひかり みち すす  
光の道を進んでいきました。



ほしぞら した ひかりみち さき  
星空の下、光の道の先で、  
なに ひか  
何かが、きらりと光っていました。

ちか  
てるちゃんが近づいてみると、  
さが  
それは、探していた  
にじいろ ほうせき  
虹色の宝石でした。

「やった！  
みつけたよ！」

にじいろ ほうせき  
てるちゃんは、虹色の宝石を  
たいせつ だ  
ぎゅっと大切に抱きしめました。



にじいろ ほうせき  
てるちゃんは、虹色の宝石を持って、  
うみ ようせい い  
海の妖精さんのところへ行きました。

ようせい み  
「妖精さん、見つけたよ」

ほうせき て  
てるちゃんが 宝石をそっと手わたすと、  
うみ ようせい わら  
海の妖精さんは、にっこり笑いました。

「てるちゃん、ありがとう。  
うみ だいじょうぶ  
これで、海はもう大丈夫」

にじいろ ほうせき  
虹色の宝石は、  
よる うみ  
夜の海をやさしく  
て  
照らしました。

うみ ようせい そら みあ い  
海の妖精さんは、空を見上げて言いました。  
れい  
「お礼に、すてきなものをプレゼント するね。  
よ  
みんなを呼んできて！」





「わあ、きれい！」

よぞら  
夜空いっぱい、  
うみ はなび  
海の花火がひるがりました。

ほうせき み  
「宝石を見つけられて、よかったね」  
わら  
みんな にこにこ 笑いました。

照  
ちゃん

よる しらはま うみ  
その夜、白良浜の海は、  
いつまでも、やさしく かがやいていました。











2026年7月制作

